

ゆ う け い

社会福祉法人 佑啓会

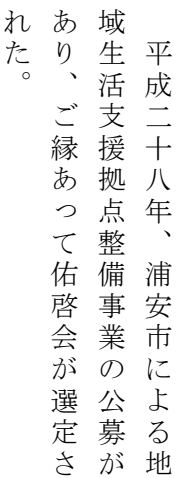
290-0265

TEL 0436-36-7611

編集者 広報委員会

堀金 兼太郎

たが、まさか時を経て日常を過ごす場所になるとは思ってもみなかった。



平成二十八年、浦安市による地域生活支援拠点整備事業の公募があり、ご縁あつて佐啓会が選定された。

は①地域における生活の安心感を担保する機能を備えるため、緊急時の迅速・確実な相談支援の実施・短期入所など②障害者等の地域での生活を支援するため、体験の機会の提供を通じて、施設や親元からグループホーム、一人暮らし

また、整備方法も選択でき、グループホーム等に様々な機能を付

加する多機能拠点を設置する方法と、既存の資源がそれぞれの役割をもつて地域全体で構築する面的整備型とあるが、浦安市では双方の併用型として計画がスタートした。佐啓会が運営する多機能拠点にはグループホームや短期入所にて体験利用と緊急時のショートステイ機能を持ち、更には在宅生活をしている方々のヘルプコールに二十四時間三百六十五日対応する

緊急かけつけ事業、また市の子育て支援事業として一歳から十八歳までのお子さん（障害の有無は問わず）をお預かりする子育て短期支援事業、その他通所施設として生活介護、就労継続支援B型、日中一時支援、放課後等デイサービスと、これらを平成三十一年四月オープンに向けて準備を進めた。

ところが工事が始まると埋め立て地特有の課題が出てきて工事に遅れが生じ、一年遅れが決定。それでも令和二年四月を目指したところで今度は新型コロナウイルスの影響でこれまた工期が延長。なんとか通所部門の一部を六月に居住部門を十一月にオープンすることできるよう今日を迎えている

どの事業も新規オープンという事で、新たな利用者さん達の対応から、真新しい建物の使い勝手一つひとつ取ってみても戸惑いや緊張の毎日。それらが日々あつちの建物、こっちの建物で同時進行

している。ましてや緊急かけつけや子育て短期など佑啓会で初めての事業もあり、手探りしながらである。皆が一人二役三役で右往左往している。このような環境になるとそれぞれの現場を抱える職員は猫の手も借りたくなり私にお声がかかる。期待に応えるべく、送迎車両の運転を頼まれれば「運転歴長いからお任せあれ」と笑顔で応え、子育て短期にきた二歳児の午睡の添い寝を託されれば「これでも三児の父ですから」と胸を張り何とか寝かしつけ、購入した家具の組み立てを依頼されれば「若いころは木工作業科だったよ」と五十肩をかばいながらトンカチを振るうのである。

気が付けば、毎晩定時に打ち上げられる夢の国の花火の音が聞こえていた。初めこそ「ああ浦安で働いているんだなあ」と実感もしたが、いつの間にかそんなことにも心躍らなくなっていた。若い職員も浦安に異動と聞いて少なからずアフター6パスポートで遊び

に行くことを夢想していたはずだ。しかし実際は日々に忙殺されたことと、コロナ禍ということもあり、法人から不要不急の外出と不特定多数との接触を避けることを厳命されているので実現はしていない。そして目下、緊急事態宣言下では花火すら上がらなくなってしまう。私たちはまだ本場の浦安市を

知らないのかもしれない。聞くと
ころによれば、特に週末の交通状
況は今と比較にならないほど混雑
していたというし、電車通勤の身
としても、平時の比ではないと実
感している。



思えば、私たちの仕事では年から年中、行事に追われるのが当たり前でもある。旅行に忘年会、成り前でもある。旅行に忘年会、成人式だ夏祭りだと一つイベントが終われば、もう次の準備を始める。自前のイベントのみならず、どこ

方々とお知り合いになった。会議や研修とももちろん真面目に参加はしているが大体は昼の会議よりも夜の懇親会の方がグッと距離が縮まったようにも思う。やはりメリハリだと思う。昨今のリモートも便利だし有効性は理解しているが、オジサン世代はやはり膝突き合わせて空気感というか温度を共有したいのである。口角泡を飛ばす議論は画面越しにもマスク越しにもできないのだ。

浦安でも実はそんな期待もあったのだが、いまだ実現できる社会情勢にはないのが残念である。

その街で祭りがあると聞けば、手作りパンを売らせてもらい、どこかの学校でバザーがあれば朝採り野菜をお届けにあがる。そしてそんな楽しみのために、日々利用者さんも職員もモノ作りに励んでいるといつても過言ではない。確かに行事を企画すれば通常業務に加えて忙しくもなるし、イベントに販売物を揃えるとなればパンも野菜も夜明け前から作業にかかる。シンドイけれど、充実感もひと

そして何よりも新しく出会った利用者さんやご家族、初めてお知り合いになる浦安での関係機関の皆さん、マスクの下の素顔を知らない人ばかり。一日も早く皆さんの笑顔に出会える日常がくることを願って止まない。今日も、マスクを着けて極力手すりにはつかまらずに上り電車に揺られ、魔法の国のひと駅手前、新浦安駅から私の日常が始まっていく。



ーションを発散する場を、長年酒席に頼ってきた身としては、その機会すら奪われ、代替案を見つけれずに更なるフラストレーションの渦に飲まれていくのである。

市原から始まり、市川、文京区と様々な異動先の地域でも多くの

息子との散歩

今 関 理 博

息子が「ふる里学舎あすみが丘」にお世話になり始めてから2年が経とうとしている。市原市今富のふる里学舎には、息子が特別支援学校小学部だったときから、日中一時支援として、また、特別支援学校高等部の時には、実習先としてもお世話になった。

市原市のふる里学舎は、私たちの住んでいる茂原市からは車で片道45分近くかかり、妻とは「ふる里学舎が近くにあれば、卒業後も絶対に通わせるのにね。」とよく話していたものであった。

その後、「昭和の森の近く」ふる里学舎ができるらしい。」という情報を聞き、とてもうれしく思ったのを覚えている。平成30年度には以前に通っていた施設に週4回、「ふる里学舎あすみが丘」に週1回という形態で併用させていただきながらの通所となった。そして平成31年度からは、完全にふる里学舎に所属させていただき、週5回通うことになった。

息子は多少の機嫌の良し悪しはあるものの、毎日楽しそうに通っている。通所施設が変わると精神的に不安定にならないかと心配したが、前年から週に1回の通所で息子の心の準備ができていたことと、ふる里学舎のスタッフの方々の対応が素晴らしかったことから、実にスムーズにとけ込むことができた。



息子とはよく散歩をする。土日に仕事が入らない限りは、2日間とも午前と午後の2回散歩をしている。

合計すると、1日に1時間半程歩いているだろうか。よく行く場所が茂原公園と昭和の森公園である。昭和の森は、「ふる里学舎あすみが丘」の目と鼻の先にある。

息子と散歩を始めたのは、息子が3歳になる頃だった。最初はほとんど歩いてくれず、息子を引きずるようにして散歩に連れ出したものである。あるとき、笠森自然公園の山道を歩かせてみたところ、とてもよく歩いた。狭い山道で、真っ直ぐに進む以外に考えられないような道であったのが良かったのだろうか。とにかく、以前の息子とは別人のようによく歩くことができた。



それから「笠森ならば！」と、暑い日も寒い日もせつせと歩いた。長いときは1回の散歩で2時間くらいは歩いたであろうか。また、茂原公園や、少々自宅からは遠いが昭和の森公園でも歩くようになった。息子は自分の気持ちをほとんど言葉で表すことができないが、表情から推察すると、昭和の森で歩くことが一番のお気に入りであるようだ。

息子を散歩に連れ出す理由の一つは、息子の趣味が少ないことにある。息子は家の中においても、自分から「これがやりたい。あれがやりたい。」と意思表示することがほとんどない。こちらから「ピアノやる？」と聞けば「やる。」と答え、「音楽聴く？」と聞けば「聴く。」と答えるが、自分から「〇〇がしたい。」と話すことは、食べ物の要求以外にはほとんどない。

在宅時は、ほとんどソファに座っているの、なるべく外に連れ出し散歩をするようにしている。散歩ならば気分転換にもなり、少々太り気味な息子のダイエットにもなる。一時はジョギングもやってみたが、息子は膝を高く上げることができず、

足が地面に引っ掛かり、転びそうになることが何度かあった。また、走っているときの本人の顔が辛そうで、自分の限界に挑戦するようなタイプのスポーツは不向きだと思い、ジョギングはやめてしまった。

やはり、程よい負荷と安全性という点で、歩行に勝る運動はないと思う。また、歩くだけでも息子はご機嫌になるし、とても幸せそうに見える。息子にとっては特別な運動することよりも、歩くことが心と体の健康によいと思えるのだ。

散歩が好きな息子は、昭和の森で散歩するのが一番好きなのである。その昭和の森の目と鼻の先にあるのが、「ふる里学舎あすみが丘」である。ふる里学舎に不思議な縁を感じるのは私だけであろうか。

現在、息子は私たち親とともに同じ屋根の下で過ごしているが、いつまでも家にいられるわけではない。私もいつまでも息子と散歩を続けることはできない。いつか、息子は親元を離れ、私たち以外の方のお世話になる日が来るはずである。それがいつになるかわからないが、息子と散歩を続けることができる間は、いつまでも散歩を続けたいと思う。息子の将来については様々な不安はあるものの、私の体が動く間は息子のそばで共に歩みたい。親亡き後の将来の準備もしつつ、今、息子と共に過ごすことができる日々を充実させたいと思うのである。

（あすみが丘保護者）

Tasuku College

～障害×生涯の学び～

川島 佑果子

昨年、佑啓会に「タスクカレッジ」が誕生しました。まず、その名前の由来から。「タスクカレッジ」の「タスク」とは、佑啓会の「佑」の文字の音読みからきています。そして、「カレッジ」は「大学」ということで、『佑啓会の学びの場』という意味が込められています。

バレー部、野球部、バンド部、バドミントン部。佑啓会には、その

他たくさんサークル活動があります。例年は、多くの職員が部活動やサークル活動に力を注いでいますが、今年度は新型コロナウイルスの影響で思うように活動ができませんでした。自粛期間を経て、職員の有り余る力を学びに変えられないかという思いから、里見常務の発案で誕生したのが「タスクカレッジ」です。



タスクカレッジが目指すところは、スキルアップとマインドアップです。ここでは、従来の研修で学ぶ「福祉」に関する知識ではなく、社会人としての成長に大切なことを中心に学ぶことができます。

講義内容の例を挙げると、「議論するスキル」「行動するスキル」「リーダーシップ」などがあります。議論するスキルについては、会議や打ち合わせなど、仕事面で重視される内容でもありますが、家族や友達との会話の中でも、想いや意見を人に上手く伝えるために大切なスキルになると思います。

タスクカレッジでは、このような内容を講義形式で学んだあと、参加者同士でのグループワークを通して様々な意見を聞き、考えの幅を広げます。そして、新たな知識としてインプットした内容を、自分の言葉にしてアウトプットするといった一連の流れが、より深い学びに繋がります。自身の価値観を広げていくきっかけになります。普段一緒に仕事をしている職員の内に秘めた思いを聞けることはとても刺激になります。

さて、「こまで」タスクカレッジについて簡単に説明させて頂きました。ですが、社会人になってまで学ぶという事に抵抗がある人も少なからずいるのではないのでしょうか。または、知識のインプットは得意だが、アウトプットすることが苦手な人も中に

はいるのではないかと思います。この場で、少し堅苦しい文章を執筆させていただいている私ですが、基本的に『なるようになる』思考の私は、考えて動くことがとても苦手です。これまで自分の直感に従い生きてきた私は、考えるよりも前に行動してしまう、いわゆる猪突猛進型の人間です。何かをやってみたいという気持ちはあるものの、具体的に考えることから逃げてきた私は、何事も目の前のことをとにかくこなすことだけでいいんじゃない。その自分を見直すべきだと感じたのが、まず、社会人になり組織で働くということを意識したときでした。社会で働くうえで、『なるようになる』といった思考は、他者に迷惑をかけるばかりだと実感しました。考えて動くことの大切さを身に染みて感じていた最中、タスクカレッジと出会い、そして自分を変えたい、変わりたいとさらに強く思うようになりました。

タスクカレッジへの参加目的は、人それぞれ異なってくるかと思いますが。福祉に関する知識が足りないと感じているのであれば、一からこの業界を学ぶ場に。いろんな人と意見交換をしたいのであれば、価値観を広げていく場に。学ぶ機会を大事にしたいという人であれば、成長できる場所を自分で見つける場に。自分の可能性を広げたいという人にとっては、体験する、チャレンジする場に。そして、叶えたい夢がある人にとっては、将来の自分を語る場になるはず。学びの内容、学びのきっかけは何だっていいと思います。大切なのは、学びたいという前向きな姿勢です。学んだことは、今後の自分にとっての大きな武器になるはず。自分自身で、

生活にも大きな影響を及ぼすものではないかと思っています。



現在タスクカレッジでは、法人内での勉強会を行っています。今は外部への発信を考えています。発信することで、障害福祉に対する理解が広がり、障害福祉に携わる人が少しでも増えるようにと、願いを込めて、学生や多くの人に障害福祉の魅力を伝えていきたいです。

私自身のこれからの具体的な目標はまだ定まっていますが、「何かを成し遂げた」と胸を張って言えるようになりたいと思います。」とにかくやってみる」というチャレンジ精神を忘れず、失敗を繰り返しながらも、自分で納得する人生を送りたいと思うばかりです。目標を持つことは、いつからでも遅くないと信じています。私が卒業した大学には七十歳になつてから入学し、二十代の大学生と一緒に学ぶ方がいました。とても素敵なことだと思います。新しい自分に出会うためにも、そして人として成長するためにも、学び続けることを忘れずに、前を向いて歩んでいきたいと思っています。

（支援員 川島 佑果子）
○●○○○○●●○○●●○○●●

～編集後記～

コロナ禍となり早1年。気が付けば次の新人職員入職まで残りわずかとなりました。まだ我慢の続く日々ですが、それでも利用者の笑顔は変わらないな・・・と。段々と芽吹き始めた春の香りを感じながら、佑啓115号をお届け致します。

（支援員 依田育美）